

奈津実の日記

奈津実



奈津実は最近プロレスにハマッてる。

ドキドキしながら、アノ瞬間を待つてる自分がある。

そのときの私ってどんな顔してるんだろう。イヤラシイ！

“男のひと同士でも急所攻め合う”ってというのが不思議。

私の力であんなに痛がるんだから・・・本当にすごいよね。

ロープまたがせてビョーンって言うのと、鉄柱に股挟んでガガーン！ っって脚ひっぱるの

・・・やってみたいョー！！

すごい見えて強烈なんだもん！

痛がり方も個性があって

ゴロゴロ転げまわって、足バタバタさせる人とか、

じーっと急所押さえて横向きになって耐えてる人とか・・・

歯を食いしげるあの表情がステキ!!!

奈津実のお気に入りは痛みをこらえて起き上がるうとして、四つんばいになったところで・・・やっぱり痛くて我慢できなくて、片手が急所を押さえてしまう・・・その瞬間。

“あああ！なんて男らしいんだろう”ってすっごく欲情しちゃうの。

不満はカメラが切り替わってしまうことが多くて・・・

やっぱりアノ悶絶姿はテレビでは見せたくないんでしょうか。

そーだよねー・・・。

もっと見てたいのにー!!!

でも会場の女性ファンはしっかり見てるのよね。いいなー。

あああ・・・恥ずかしいだろうな・・・みんなにアノ格好見られて・・・うふふふつ。

5月になって温かくなると、奈津実はムズムズしちゃう。

男の人も薄着になるでしょ？

奈津実のお気に入りは、「ジーンズ」

男の人のジーンズ姿ってすごくセクシーでカッコイイ。

履き込んで色落ちしたお尻とか・・・

もちろん・・・前も・・・

ピッチリしてないのはだめだよ！

前カレに聞いたんだけど、真中のチャックの所が厚ぼったくて狭いから、右とか左に寄るんだって。うふふつ。そうなんだあー・・・

電車とかで座ると、ちようど目の前に股間が来るじゃない？

チラつと見ちゃう。

プツクリしてると・・・

あああくん！ 蹴り上げたくなっちゃうよー！

頭の中でプロレスシーンがフィードバックされて、変な気持ちになるの。

きっと男の人が、ミニの女性の脚、チラチラ見ちゃうのと一緒にだと思っただけ。

この前の休みにバツサリ髪を切っちゃった。
久々のショート。

特に理由も無かったんだけど。

それから彼と待ち合わせて、池袋で水着を買った。
二人して白にした。

もちろん私の下心があつての色決めだけどねっ！

男性用の水着・・・去年くらいからかな・・・ビキニが極端に減っちゃって淋しいの。やっぱり男らしく強調して欲しいじゃない？ドキドキしながら盗み見たいもの。

帰りにちよつと飲んだら・・・やつぱり我慢できなくなっちゃった。

「しよっか！」

そしてHOTELへ。

大きなテーブルがあつたので、迷わず彼の手足をテーブルの脚に縛り付けた。もちろん買ったばかりの白いビキニはかせて・・・

ストッキングがまとわり付くように彼の手足をテーブルに捕らえる。

私、スッポンポンよりビキニ越しのモッコリが好きなんだ。

薄い布越しにポールkunとタマタマの形が浮き出るのが余計にイヤらしい感じがして。

後ろに突き出したお尻を愛撫してから・・・股間の膨らみへ指を滑らす。最初は3本指で片タマずつキューってひねりあげて

・・・ホテルだと彼、我慢しないで悲鳴上げるの。可愛いよ。

指で強くピン！てはじくとタマタマがキュって縮こまる様にあるの。そしていよいよ、つま先蹴りの連続へ・・・

彼の体から脂汗が吹き出てきて・・・

「奈津実！お願い！！ほじめて」

「ダメ！苦しいなら・・・私がアソコ押さえて上げるから！」

「あああああ・・・お願い・・・優しく押さえて・・・」

倒れることも、股を閉じることでもできずに・・・痛みに耐えながら、私に急所を押させてもらおう。

ステキ!!!

こぶし・膝・つま先・・・容赦なく急所を後ろから責めた。

1時間以上耐えたから、ご褒美にほどいてあげた。

そしたら・・・彼崩れ落ちる様に・・・やっと自分で股間を押さ

えて「くの字」に倒れこんだ。

お尻の筋肉をピクンとさせながら・・・手がタマタマから放せない・・・低い声でうなりながら、手で包み込むように大事なタマタマを押さえる彼。左手はこぶしを握り締めて、おへその下を震えながら押さえている。

本当はこの格好が見たかったんだ。

私だって・・・我慢してたんだ・・・

私はベッドに腰掛けて、床に転がる彼の手を蹴り払って股間を踏みつけた。

「ああああ！奈津実!!!」

彼に見えるように思いつきり股を開いて私は座り直した。

そして自分の下着の右脇から指をこじ入れた。

股間を踏まれて、苦しげにうめく汗まみれの彼に見つめられながらのオナニー。
ステキすぎる・・・

奈津実は・・・
やっぱりやめられないの。

もうすぐ・・・1年経つんだ。
あの事故から・・・

ジーンズとシミメカートと香水

ああああ・・・どっちにしようか・・・
迷っちゃう・・・時間ないのに・・・
ボサボサの茶髪と泣きボクロが鏡の中で笑ってる・・・朝。

本当に好きなのはジーンズ。
男の人はもちろんだけど、同じ女性でもジーンズだけはチェックしちゃうほどのジーンズフエチ。
この世で一番セクシーなもの・・・って言われたら、間違いなく「ジーンズ」って答えると
思うな。私。

深い深いインディゴのブルーが自分の体に沿って色落ちしていく様は・・・
セクシーとしか言い様がない。
何本持つてるか分かんないくらい・・・
でも、見るとまた買っちゃうの。
友達に「瞳の大きい女は欲張りなんだよ！」って笑われた。
タイトに私の可愛いおしりを包んでくれる・・・

ジーンズの日の香りはcKibeって決めてる。

でも男の人の視線を楽しむなら、やっぱりミニスカしかないみたい。うーん。あの見られてる快感も捨てがたい・・・

奈津実はミニスカの時は必ずパンスト着用なの・・・
脚のお化粧だと思ってる。

光が当たるとホントに綺麗なんだよ！キラキラして。

キツて睨むと目をそらす・・・男の方が、やっぱり女より正直なんだ、って思う。

タイトミニの私を見ながら・・・

何想像してるんだろうナ・・・

私が・・・もつとHなこと考えてるなんて、きっと思わないだろうな・・・

スーツの日はシャネルNo.19って決めてる。すごくHな気持ちになる香り・・・

一度でいいからアノ痛み・・・経験してみたい・・・

分かってないからそんなこと言えるんだ！って怒られそうだけど・・・

体臭のある男のひとが好き。

鋼のような筋肉・・・

厚い胸板

引き締まったお尻

太い腕

そんな強い獣のような男が・・・

奈津実の足元で悶え苦しんで・・・涙を浮かべる・・・

「タマタマ」押さえる手が震えてるよ・・・

どうしたの？

脚を閉じたり・・・開いたり・・・
どうやっても・・・痛くて・・・苦しくて・・・
我慢できないの？
男の癖に
だらしない・・・

口から漏れるうめき声
珠のような汗
立ち上がろうとして
脚に力が入らずに
また急所を押さえて
倒れこむ

腰骨にキスしてあげる
あああ・・・獣のような体臭が奈津実の香水と混じりあう瞬間・・・

それは官能の宴の序曲・・・

太陽と月

あなたの光に照らされて
初めて生まれる・・・
私は奈津実

あなたがいないと
私は消えてしまうの・・・

そんな弱い私に
どうしても勝てない

だって
あなたは
男だから

もつと悶えなさい・・・
誰にも見られたくない
その恥ずかしい格好を
我慢できないんでしょ・・・
ステキよ

いいのよ
手で押さえないさい・・・
大事なところを
私に虐められた
男の急所を
押さえて転げまわるの

あなたに抱かれるより
あなたの
その惨めな姿で

奈津実はとけてしまいそう・・・
奈津実のお気に入りのパルファムを
あなたの大事な所を隠してるビキニにぶちまける
咽かえるほどの香りに包まれたら

待つてあげるから
ちゃんと立ってね

もう一度
その股間を

蹴り上げてあげる

さつきより
もっと もっと もっと
強く

朝帰り

ゆう君と会った。

2年ぶりかな・・・
ちっとも変わってない。

突然ケータイに入ってきたから

びっくり・・・

ゆう君の番号、変わっちゃってて
連絡つかなくなってたし、

私にも彼が居て
ゆう君にも彼女ができて・・・

なんとなく「繰り返すのやめよう」って・・・
言葉に出した訳じゃなかったけど
私の中では

さよなら

したつもりでした。

「会おう」

「今から？」

「嫌か？」

「嫌じゃないよ」

「じゃ・・・」

「あそこでしょ」

いつも二人で飲んだBAR

小さく流れるジャズ

煙草の煙

トイレの壁

ルージュの落書き

何ひとつ

変わってない

一人でも何度か行ったけど・・・
ここで飲むなら

隣に座るのは

やっぱり

ゆう君だけって思った。

恋人って訳でもなく

なんだったんだろう

二人の3年間は・・・

お互い何を話すでもなく
何を聞くでもなく
カウンターで
ジャックダニエルを飲む。

「髪切ったんだ・・・」

「似合う？」

「ああ・・・いいね」

「嬉しい」

キスした瞬間

“ あっ・・・ゆう君だ・・・”て感じる。

きつと同じように

“ 奈津実だ・・・”て思ってるのかなあ

何も話さない代わりに

いっぱい、いっぱいキスした。

分からないままがいい。

私は女だし・・・

ゆう君は男なんだから。

「きつと、奈津実に負けない位、強くなったよ」

「うそ！勝てるわけじゃないよ・・・だって・・・」

「でも・・・遅いし、今日は帰ろっか？」

「うそ！帰るわけじゃないよ・・・ここで飲んだら」

「そうだけど・・・明日、仕事じゃないの？奈津実・・・」

「仕事に決まってるじゃん！」

「じゃー・・・行くか」

「ばか！」

二人とも大笑いしながら

ホテルに入った。

部屋に入るなり胸をまさぐって来たから

ひざで真ん中を蹴り上げた。

「ぐふっ！」

股間を押さえて倒れこむゆう君

「ちっとも強くなってないじゃない！？」

「今のは反則だよ・・・」

「なんで？」

「急所蹴りだよ」

それから・・・一緒にお風呂に入った。
真っ赤に腫れ上がった大事なタマタマに
私はいっぱいキスした。

ゆう君も私の急所にいっぱいキスしてくれる。

一度も

“好き”

ってコトバ・・・お互い、言わなかった二人・・・

でも、心も・・・体も

よく知ってる。

いいのかな・・・

朝まで

何度も、何度も、何度も、何度も
急所蹴りとセックスを繰り返した。

ゆう君のばか！・・・

ちっとも強くなってるない

いっぱい抱いてくれて

嬉しかったよ・・・

奈津実・・・

ただ一つ、変わったのは

昨日の夜、私のケータイに残った
ゆう君の新しい番号だけ。

朝

2年前と同じ
駅のホームで
ゆう君の背中は
人ごみの中へ
消えていった。

赤い風船と観覧車

遊園地へ出かけた・・・

随分行ってなかったんだ。
なんだか、子供の頃に戻ったみたいで、
はしゃいじやった！

ジェットコースターに乗ると、子宮がキューーン♪って
来るの。
はぁ・・・

彼に聞いたら
"キンタマも縮むよ！"だって！
同じだー！って噴出しちゃった。

彼のリクエストで今日は白のマイクロミニ・・・

もう！エッチなんだから・

彼のだけじゃなくて・・いろんな男の人の視線を痛いほど
太ももに感じちゃう。

だめ・・奈津実〃見られてる・・〃って思うと
スグにアソコが恥ずかしい状態になっちゃうの。

でも負けじと私もリクエスト！

で彼は約束通り、リーヴアイスの501。

思いつきり右側、モッコリしてて・・えへっ・・

お尻もキュって引き締まって、カッコイイ！

意地悪な私は・・腕を組んで歩きながら、
胸のふくらみを、何度も彼の腕に押し付ける。

「あの・・奈津実さあ・・」

「なあに？」

「俺・・」

「どうしたの？」

「ちよつと・・あそこのベンチに座っていい？」

うふふっ・・

「大っきくなっちゃった？」

「・・・・・うん・・」

「いたた・・」

「大丈夫？」

「ちよつと・・位置がね・・」

「大変ね・・」

ベンチに座って・・私がソフトクリーム買ってきてあげた。

二人で半分こしながら、また彼の腕に絡んで胸を押し付ける。

「奈津実！！」

「はぁい」

本当は、私も・・・濡れてるの・・・
さっきから・・・

スカート白だし、わかっちゃいそう。

もう・・・昼真っから二人して・・・

いろんな乗り物乗って・・・
はしゃぎまくった。

彼が買ってくれた風船。

ずっと左手に巻きつけながら・・・

子供の頃、家族で出かけて、買ってもらった赤い風船。

宝物みたいに大事にしたのに・・・
するっと手から逃げてしまった。

「あああ！」

青い空にどンドン昇ってく。

「ちゃんと持っていないから・・・」

「お空がかーして！だってよ。なっちゃん」

「また今度買ってやるから」

そうじゃないの・・・

あの風船が

ほんの短い間だったけど・・・

初めて買ってもらった・・・

浮かぶ風船

赤い風船

私の宝物

あの風船じゃなきや

ダメなの・・・

ずっと・・・家に帰るまで泣いてた。

「風船持ってる奈津実って結構可愛いな・・・」

「結構・・・って何よ！」

観覧車に乗った。

彼の隣に座って・・・

ジーンズの膨らみをピンピン指ではじく。

「あっ！・・・ああっ！」

可愛い声！

もう・・・ダメ・・・

彼のジーンズのボタンはずして、

彼は私のスカート捲り上げて、

彼のひざに座ると、ショーツの脇から
熱いものがヌルン！て私の中に入った。

「・・・・・・・・」

声が出ちゃう・・・

後ろから抱っこされたまま・・・

私の股間の下にある彼のタマタマを
キュってひねる！

「ああっ！」

彼の声と同時に私の中の彼がピクンって動く・・・

ずっと観覧車・・・

とまらなければいいのに。

帰りの車の中で

何度もキスして・・・

「奈津実・・・」

「そうだね・・・」

「奈津実の部屋がいい・・・」

「いいよ」

「風船、真っ先につれて帰らなきゃ」

「ありがとう」

私のベッドの中で

二人でビール飲みながら

何度も彼のタマタマをいじめる。

私のベッドの中で

急所を押さえて内股になって苦しむ彼・・・

「ああ・・・奈津実もう・・・我慢できないよ・・・」

「いいよ・・・してごらん」

タマタマを私に握られたまま

彼にオナニーさせる

彼の表情、

下腹部の痛み・・・

そして昇りつめる瞬間・・・

いとおいしい・・・

付き合いだしてから・・・
初めてだね。

私のベッドの中で
二人。

そして天井に

赤い風船。

風の道

季節外れの台風

雨と風

風の通り路を見たくて
窓の外を見ていた

私が生まれる前から

この風の通り道は決まっていたのかもしれない・・・

バサバサと木が揺れて、窓を雨が叩く

風の強い日が好きだった。

いつも重大な決心をする日って、

風の強い日ばかりだった気がする。

自分で決め切れなかったコトが

風に吹かれて・・・ふっと・・・腑に落ちる

じゅんちゃんにサヨナラ言った日も

風の強い日だったよね・・・

そして東京

嫌いなんかじゃないよ・・・今だって
だけど・・・あの時は言えなかったの

「待っていて」って

「ナッツン、送ってくぞ！」

「いえ・・・いいですよ・・・」

「でけえ台風来てんだぞ。」

「知ってます！そのくらい！！！」

「中央線、弱いぞ〜(笑)」

「確かに・・・でも・・・会議資料が・・・」

「明日！明日！・・・明日は丸」日、時間やるから」

鬼みたいに怖いけど・・・課長が・・・好き。

本当は暖かいんだ。

「ナッツン、昼食ってないだろー」

「そんなことないですよ」

「ウソ付け！昼食ってたらお前がアソコまで終わるはずがない

(笑)」

「・・・！！！」

「素直でよろしい！じゃ食いに行くぞ！」

「はい！」

何回目かな、課長の車。

ガラン♪ガラン♪とディーゼルがすっこいうるさい音立てて・

でも私は大好き。課長そっくりのでっかいワゴン。

ちよっと脚を伸ばして千葉まで出かけた。

私腹ペコなんだけどな・・・

何で千葉まで行く訳???

言い出すと子供みたいになる

それに・・・台風来てるんじゃないのかしら・・・(笑)

「懐かしい場所なんだ」

「そうなんですか？」

「この味は一回食ったら忘れられねーぞ」

「奥様口説いたお店なんでしょう」

「違うんだなくそれが・・・」

可愛いトラットリア。

黒板のお勧めのお魚と小さなパスタを頂く。

課長はお肉。うーん課長らしい。

さすがに台風だけあつて

殆ど貸切状態。なくんか嬉しい気分。

「ナッツン、飲め」

「でも・・・」

「俺もビールだけ付き合う」

「はい。ありがとうございます」

あれだけ人に厳しく求めていながら、

会社を出たら一度も仕事の話をしたことが無い。

すごいな・・・って思う。

二人でエスプレッソを飲みながら煙草に火をつけた。

「かえって遅くなっちゃった・・・ますますひどくなるな・・・こりゃ」

「じゃ・・・わがまま言ってもいいですか」

「アイよ！言ってごらん」

「海・・・見たいんです」

「がははは！！！！バカヤロ！この嵐の日にか？」

「いえ・・・いいんです」

「言い出したらきかない奴だからな・・・」

「それは課長です！」

ホントにすぐ近くだった。
港に繋がれた船が怖いほど揺れている。

シートを倒して課長が煙草に火をつける。
ちよつとだけ開けた窓から雨が吹き込んでくる。

「課長・・・風の路って・・・見たことありますか・・・」

「かぜの・・・みち？・・・ないな・・・どんなもんなんだい？ナ
ツツンには見えるのか？」

「いえ・・・見えないんです。」
「なんだそりゃ」

「どうしても自分で決められないことがある時・・・強い風が吹
いて・・・自分の行くべき方向に扉が開くんです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そういうことか・・・・・・・・」

一瞬、鳥肌が立った。

ソウイウコトカ・・・

「何年も前だ・・・さつきの店で食事した後
ここに来てな・・・」

そう・・・風の強い日だった・・・」

課長の頬に、涙が伝った様に見えた。

「私・・・」

「風の路か・・・」

「はい・・・」

車の外に出てみた・・・

雨がしよっぱい。

海が雨と混じってるみたい

でもやっぱり・・・

風の路は見えなかった。

車に戻ると

勝手に私の煙草に火をつけてる課長・・・

「ほら！」

課長は、私の口に煙草をくわえさせた。

私は深く吸い込んだ。

おいしい・・・

小さく窓を開けて煙草を投げ捨てた。

私は引き寄せられ、

私の首筋を

しっかりと腕で支えて

優しいキスをくれた。

煙草の匂い・・・

どうしてかな・・・

涙がぼろぼろこぼれた。

「本当は抱きたい」

「・・・」

「奈津実って呼んでいいか？」

「・・・」

「ごめん・・・」

「謝らないで」

「どうかしてる」

「いいの」

こんな私にも、いろいろあったんだもの
課長にだって・・・

背中が痛くなるくらい
抱きしめられた。

課長のタマタマを中指でピン！ってはじく。

「痛たたたたーっ！」

「ふふふっ・・・」

「怒ってんのか？」

「ううん！おまじない・・・」

「何の？」

「内緒・・・」

二人で見えていた

荒れ狂った海

横殴りの風が何度も車を揺らした。

「帰ろう・・・」

「はい」

今・・・”風の路”の真ん中に
二人でいるのかもしれない。

じゅんちゃん

想い出は

突然襲ってくる。

ずっと昔のことなのに

まるで昨日の出来事のように

蘇っては・・・

奈津実を苦しめる。

ずっと大好きだった　じゅんちゃん・

私の二つ下

甘え上手

わがまま

弱虫の癖に

強がり

そして

本当に私を

愛してくれたひと

“奈津実の笑顔が好きだから”

生意気に・・出会った日から私を呼び捨てにした。

私が沈んでいるときは、いつもそばにいてくれた。

どんな無茶を言っても

“惚れた弱みだよな”って私を喜ばせてくれた。

“奈津実の笑顔のためならできないことはない”

いつもそう言ってた。

私が東京の大学に行くことが決まった時も

“関係ないから。どんなに距離があっても”

と全く動じなかった。

愛されているのは痛いほど感じてたし

じゅんちゃんが大好きだった・・

“ 帰ってくるんだろ ”

新幹線のホームで笑うじゅんちゃんに

“ 待っていてね ”

と言えずに私はうつむいた。

じゅんちゃんとなら幸せになれる・・・

間違いだらけの私だけど

じゅんちゃんとなら・・・

きつとまっすぐ歩いて行ける

何度もそう思った。

でも

自分さえ愛せなかったあの頃の私は

じゅんちゃんの気持ちを感じれば感じるほど

なにも言えなくなった。

そして

東京での暮らし。

毎年、

春と秋に、じゅんちゃんは必ず私に会いにきてくれた。

そしてお盆と正月には、必ず私がじゅんちゃんに会いに田舎に戻った。

会うと二人とも待ちきれなかったように

セックスをした。

今でも、きつとこれからも

躰から抜けることのない

甘く、優しい、激しい時間。

それから

ふたりで迎えた

いくつもの夜明け。

誰が見ても相思相愛のふたり。

じゅんちゃんは田舎で就職した。

それでも

春と秋には休みを取って東京に来てくれた。

働きはじめたじゅんちゃんは

ひとまわりも

ふたまわりも

大きく、逞しくなった。

会えないときは思いを綴った長い手紙が届く。

嬉しくて何度も読み返しては、じゅんちゃんの優しい文字を指でなぞった。

何万回

“愛してる”

って言ってくれたろう・・・

なのに・・・

私は

“愛してる”って答えられないでいた。

私は東京で就職した。

桜の季節

“ 奈津実・・愛してる ”
躰の隅々までキスしてくれる。

会うたびに深く、女の喜びに躰が目覚めて行く。
逞しい腕に抱かれて何度も昇りつめた。
ふたり眠れずに・・キスをしながら夜明けを待った。
うっすらと夜が明け始めた頃、近くの公園にふたりで出かけた。
春のまだ肌寒い夜明け。

東の空が赤く焼けていく。

大きな桜の木の下で長いキスを繰り返した。

“ 今日戻らなきや ”
“ また淋しくなっちゃうね ”
“ 奈津実・・帰って来いよ ”
“ ・・・ ”
“ じゃ・・今度はお盆だね ”

その夏

初めて

私は田舎に帰らなかった。

生理が止まった・・

・・妊娠

田舎に帰らない私に

じゅんちゃんはすぐに事態を察した。

そして東京に出てきた。

“結婚しよう！戻って来いよ”

“産めよ。一緒に育てようよ”

“東京がいいなら・・俺も東京に出るから”

だめなの

病院で・・

私は全てを

裏切った

“俺じゃダメなのか”

“・・・・・そうじゃないの”

私なんかじゃない

じゅんちゃんが一番傷ついた

“一人にして・・・お願い”

“俺、待ってるから・・・奈津実を・・・待ってるから”

“もう　待たなくていいよ”

“どうして・・・どうしてそんなこと言うの”

“帰って”

“奈津実・・・ごめんよ”

“帰って”

それから・・・何度もじゅんちゃんは手紙をくれた。

いつも最後に

“愛してる”

読むと涙が止まらなかった・・・

返事を書こうとすると

“Dearじゅんちゃん”

その後が何も書けない・・・

いつもそこで破り捨てた。

じゅんちゃんからの手紙は少しずつ・・・
間が空くようになった。

次の夏・・・

じゅんちゃんから長い手紙が届いた

“好きな人ができた”

その手紙を握りしめて私は夜行に飛び乗った。

ホームに降り立つと

そこにじゅんちゃんが立っていた。

私はホテルをとり実家には帰らなかった。

その夜

私はじゅんちゃんに抱かれた。

“いいひとなの？”

“うん”

“良かったじゃない！”

“俺は弱かった・・・壊れそうだった”

“そうじゃないわ・・・私が・・・”

東京に戻って

1週間、私は会社を休んだ。

10月の肌寒い夜だった。

じゅんちゃんからの電話・・・

“今・・・東京に来てるんだ・・・会えるか”
いつものバーで飲んだ。

” やっぱり・・・奈津実と・・・やり直したくて ”

” 彼氏できちやったの ”

” 奈津実・・・ ”

カラン・・・とグラスの中で氷が音を立てる。

” ……幸せなのか ”

” ……うん ”

” 彼のこと・・・愛してるのか ”

” ……愛してるよ ”

もう一度だけ・・・抱かれたかった・・・

じゅんちゃん・・・あなたに

抱かれないの

淋しそうなじゅんちゃんの背中を
ホームで見送った。

それから半年が経った。

じゅんちゃんから

長い手紙が届いた。

” 結婚することにした ”

結婚式の前の夜・・・

私はじゅんちゃんに会うために田舎に戻った。

昔からふたりのお気に入りのお店でラーメンを食べた。

それから、ふたりの思い出の灯台へ行った。

秋の風が海の匂いと共に

私のなかを吹き抜けていく。

“おめでとうを言いに来たの・・・

でも・・・その前に・・・

ごめんなさいを言わなくては”

“謝るのは俺の方だよ”

“違うわ。ずっと・・・愛してるって言ってくれたあなたに・・・

私は一度も答えなかった”

“いいんだ・・・奈津実が笑顔でいてくれたら。愛してたのは俺

の気持ちだから”

“ありがとう・・・女の一番きれいな時と一緒に過ごせて幸せだったよ”

“彼氏とはうまくいったのか”

彼氏なんか

いるわけない

じゅんちゃんのが

一番好きなんだ・・・

今ごろ気づいて、私。

何もわからずに・・・
何も見えずに・・・

ただ　じゅんちゃんを苦しめてきた。

怖かったの
自分が

愛することが

“　うん　”

“　じゃ、奈津実が結婚するときは教えてよ！今度は、俺がおめ

でどう言いに行くから”
“　わかったわ　”

上りの夜行の時間

“　ホームまで見送るよ　”
“　ダメ・・・いつも好きだって言ってくれた笑顔のままです・・・”
“　奈津実　”
“　ダメ・・・泣いちゃうから　”

抱き寄せられて
キスしたとたん
涙があふれて止まらなくなった。

“じゃ！！”

思いつきり階段を駆けのぼった

“奈津実！！幸せになれよ！！”

じゅんちゃんの大きな声が私の背中を追いかける。

馬鹿！

絶対泣かないって

あれだけ約束したのに・・・

列車のドアが閉まったとたん

私は堪えきれずに

声をあげて泣いた。

初めて素直になれた気がして・・・

体中の力が抜けていった。

じゅんちゃん

幸せでいますか

奈津実は・・・

あなたに愛されて

少しだけ大人になりました

奈津実

あなたと別れて

はじめて女であることを知りました

奈津実

帰る場所をなくして

やっと自分の足で歩き始めました

あなたの幸せを

いつも

いつまでも

祈ってます。

OL奈津実

「奈津実の会社の制服って・・・どんなんだっけ」

「薄いブルーグレーのスカートとベストだよ」

「ブラウスは・・・白？」

「エッチなこと考えてるんでしょ!？」

可愛いの!!

男の人の制服に引かれる気持ちって、なんとなく分かる気がする。

ウチの制服は、そのまま履くと、丁度ひざ丈のスカートなの。

ダッサくて大嫌い。

40代超えたお局さま達は、そのまま履くけど、

30代OLは一つ折り。

20代は二つ折りが一応常識になってる。

私は・・・三つ折り。
だって動き易いんだもん。

でも男性社員の熱い視線がよく飛んでくる。
えへっ！いいの。

男の人の視線って素直で好き。
だって男の人が、見てくれなくなったら、女終わりだもん。

「奈津実のOL姿見たいんでしょ！」

「う・・・うん・・・」

「どうしよっかな〜」

「いや・・・ダメなら無理しなくても」

「ふん。その程度なんだあー」

「いや！見たい！って言うか・・・」

「分かってる・・・」

本当は、ちよつと奈津実も期待しちやったりして。

ビールいっぱい買い込んで、「制服」持って彼の部屋へ。

「持ってきた？」

「なによ！それが挨拶？」

ドアを閉めると同時に、彼の大事なトコにひざでぐぐ挨拶した。

「あぎゃー！！」

私の足元に、崩れ落ちる彼。

「あら？・・・どうしたの？」

「奈津実！！」

「痛そう〜。大丈夫？」

うずくまって、タマタマを押さえてる。

“クール”をいつも、装うけど、

本当は彼の、あの痛そうなポーズ見た瞬間

聞こえちゃいそうなほど、心臓が高鳴るの。

はずかしい女に、なっちゃう。

いやよ！・・・奈津実はこんなにHな女なの？・・・

でも、見ていたくてしょうがない。

好きで、好きでしようがないの。
隠せない・・・。

「ビール買ってきたよー」
私は冷蔵庫にビールを入れて
シャワーを借りた。

ああ・・・もうアソコが濡れてる。
どうしよう。

もう！ 恥ずかしいのに。
スグ濡れちゃうの。

「はい！」

シャワー上がりの私にビールを差し出す彼。

「サンキュー！」

「奈津実・・・」

抱きしめられて、
キスする。

「待ってね。着替えるから」

黒のシャツに合わせて、黒のブラしてきたから、
制服の白いブラウスから、黒が透けちゃって、ハズカシイ。

彼の部屋で着る会社の制服。

すーっごい変な感じ。でも・・・

「じゃーん！ 第三営業部代表ナッツンです」

「綺麗・・・みんな毎日こんな奈津実見てるんだー」

「ばーか！！！！」

“綺麗”ってコトバに女は弱い。情けないくらい。

「キスして・・・」

抱き寄せられてキスされる・・・

椅子に座らされて、脚を開かされた。

「やだ！ こんな恥ずかしい格好！」

ストッキング越しに彼の指が私の脚をまさぐる。
感じちゃう。

「ほら・・・奈津実・・・こんなに濡れてる・・・」

「いやー！」

奈津実の大事なところ、ストッキング越しに彼の指がいじめ始める。

「あああつ・・・」
股を開かされたまま、アソコをいじられて・・・彼にしがみつく
しかできない私。ピクン！って腰が動いちやう。
ハズカシイ！！

本当は昨日の夜。

この制服着て、

彼の愛撫を思いながら・・・

「アソコ」自分でいじってたの。

鏡の前で、脚を広げて・・・

パンストの真ん中の縫い目に沿わせて、指を動かした。

「ダメ・・・」

我慢できなくなった、

奈津実

パンストの中に指を入れて、いつもの様に直接アソコをいじるの。

鏡の中の指がパンストの中で、いやらしい動きを繰り返す。

何度も昇り詰める自分を鏡の中に見ながら。

どうして、女ってこんななんだろう。

彼の股間に手を伸ばして、急所を包む様に握る。

「あ・・・奈津実」

ぎゅ！って力を入れた。

「あああ！」

彼の手が私の股間から離れて自分のアソコを押さえる。

「反撃開始よ！」

彼の手を払いのけて、ジーンズのボタンをはずす。
黒のビキニ。

私とおそろいだっただ。

はちきれんばかりのペニスの下の可愛い膨らみに、ビキニ越しにキスした。

「あ・・・」

「もう！エッチなんだから！」

思い切り、指でタマタマを弾いた。

「あうっ！」

「ダメ押さえちゃ。我慢しなさい。」

「奈津実・・・」

アソコを押さえる代わりに、私の肩を、痛いくらい彼がつかむ。

「そんなに痛いのか？」

「ああああ・・・だって・・・」

「男の急所だもんね・・・優しくしてあげるね」

そういいながら、何度も、左のタマばかり「ピン♪」って弾いた。

「うっ！・・・ううっ！」

彼の腰がピクン！と跳ね上がる。

黒いビキニを膨らませたペニスの先から、愛液が滲み出てきた。

ビキニ越しにペニスの先に丁寧にキスした。

「ビール飲もつか！」

立ち上がりざまに彼の急所をつま先で蹴った。

「ああああああっ！」

可愛い。

アソコ押さえて、苦しんでる彼の格好。

ステキよ！

彼の隣に座って、腰をさすってあげた。

「大丈夫？」

「愛してる・・・」

「ふふっ」

抱き寄せられて、ベストのボタンをはずされた。

ブラウス越しに、胸を愛撫される。

最近胸がすごく感じるの。

自分で触っても、そうでもないのに。

彼に触られると・・・

彼は私に馬乗りになって、ブラウスのボタンをはずし、

ブラの下から直接左胸ばかり愛撫した。

好きなの。

左胸・・・

あああ・・・感じちゃうよー！

犯されてる・・・この感覚。

下から突き上げる様に、彼の股間を蹴り上げた。

私の胸に無中になってた彼の、無防備なアソコに私のひざが

モロに入った。

私の上に崩れ落ちる彼の重さを全身に感じながら

キスを繰り返した。

ステキ。

自分の体重さえ、支えられないでしょ。

アソコが痛くて・・・

苦しむ姿を見せて。

私だけに。

男の一番弱い姿を見せて。
甘えていいのよ。

今私の感じてる重みが、
裸のあなたなのよね。

ストッキングとパンティー一緒に下ろして・・

彼にまたがる。

制服のスカート捲り上げて・・

彼の熱いペニスをアソコにあてがって、腰を下ろした。

「あ！ ん！！」

入る瞬間、自分でも信じられないくらい大きな声が出ちゃった。

彼の急所を握りしめながら、彼の上で腰を動かす。

下から突き上げられる快感がたまらない。

彼の上で・・・

何度もいった。。

何度も。。

はずかしい。

会社の制服を着たまま・・・

ベストとブラウスの胸をはだけて・・・

♀になってる。

「ねえ！もう一回しよ！」

「ちょっと待って」

「待てないー！！！！！」

「奈津実・・・」

「もう一回して！」

会社で・・・制服に着替えると
思い出しちゃうの。

奈津実はいやらしい女だって。

お月様

お月様が来る。

月に一度の憂鬱な日々。

ずるいな

男の人にはなくって。

女だから、仕方ないけど。

まあ、来ないのも・・・困るんだけどね。

友達はそろって、”生理前になるとしたくなる”って言うけど、
私は逆。

生理中から、生理の後にかけて、我慢できないほど
”したく”なるの。
それはもう、理性ではどうにもならなくて、
自分の中にもう一人の奈津実が居るみたい。

こいつが手ごわくて・・・
おまけに、胸も、クリちゃんも、
飛びっ切り敏感になってるし。
つい・・・ね。

最近はいつも鏡の前で、してしまふ。

鏡の中の奈津実は
すごく
淫乱

だれにも見せたことがないほど
淫らな女になる。

憂鬱な日々が終わったあとの
ご褒美なの。

初めてオナニーを覚えたのは中学2年の夏。
昼間、友達とエッチな話したこと、夜になって思い出したの。
そしたら、変な気持ちになって

こっそり・・・
ショーツの上から・・・
指を当ててみた。

あ・・・濡れてる・・・

とっっても自分が不潔になったような気がして
自己嫌悪・・・

なのに
動き始めた指を
途中で止められなかった。

まるで下半身が溶けちやうような・・・
快感
下着からしみてくる
濡れた液体が、中指にまとわりついて・・・
指は加速してしまう。

“ 奈津実・・・なによ・・・これ ”
“ 不潔!!! ”

毎晩、誘惑と戦った。

ダメ！ つていいながら、
勉強中も椅子に消しゴムを置いて
アソコに当たるように座って・

葛藤の中で、繰り返すごとに
拒もうとする心とはうらはらに
体はますます敏感になって行く。

いつの間にか、直接アソコ触るようになってた。

“奈津実って・・・いやらしい女”

そう思うと余計に触りたくなる。

この前彼が

“生理用ショーツ履いてる奈津実としたい”つて

良くわかんないケド、いいんだつて。

「生理中に、つてこと??」

「うん・・・いや?」

「いやじゃないけど・・・汚れるよー」

「いいの」

「ふうん。そうなんだ」

うそ！

今までにない”期待”を抱いてる自分がある。

ナプキンもはずして

生理用ショーツ一枚だけ身につけて、

胸を隠しながら

お風呂に入る。

なんだか恥ずかしい

彼は白のビキニ。

ふたりで向かい合ってバスタブにまたがった。

”じゃんけんで負けたら急所打ちだよ！”

だって・・・バスタブにまたがったら

私の急所、隠れちゃうもの。

じゃんけんぼん！

軽くゲンコツを振り下ろす。

バスタブと私のゲンコツの間で

彼のタマタマが

プニン！！って・・・

「ああっ！奈津実！！」

あつという間にバスタブから転げ落ちた。

「ごめーん！今のモロだったね〜」

「……………」

ピン！と脚を突っ張って内股になる彼。

両手で急所を押さえたまま動けない。

歯を食いしばって……頭をのけぞらせる……

「あゝん！セクシーよ！」

「……………」

「待ってあげるから、もう一回！」

脚に力が入らないまま、必死で起き上がってくる。

可愛いなあゝ

男の人って

あんなに痛そうにして

「もう一回ね！」

「う……うん」

じゃんけん ぼん！

きやつ！ また勝っちゃった！！

「えい！」

「ぎゃ！……な……なつ……」

またもや……バスタブから転げ落ちる彼。

「勝負にならないねえ」

「ま・・・待って・・・」

くの字になった彼を舐めるように見ている私。

「ねえ！触りたいんでしょう？ 奈津実のココ」

私は濡れた自分の股間を指さした。

「う・・・うん」

「じゃ・・・急所押さえるの我慢したら、ご褒美に触らせてあげる！」

彼は、急所から震える手を離して・・・私の脚にしがみついた。
不規則で、激しい彼の吐息が、私の太ももを刺激する。

「おいで・・・」

抱き起こして、またバスタブをまたがせる。

私は中腰になって、彼の手を私の股間に導いた。

「こ・・・こんなに・・・奈津実だつて・・・我慢できなくなってる」

「あー！そういうこと言うんだー」

私はまた、コン！つて、バスタブの上の彼の“ふくらみ”に
ゲンコツを落とした。

「うーっ！」

私のアソコが痛いくらい・・・彼の指先に力が入る。

・・・ステキ！必死に耐えているのね。

男の痛みに・・・

もう一度・・・軽くコン！つて叩いてみる。

「ダメ！奈津実！！」

彼の手が、私から離れて・・・やっぱり急所を押さえてしまった。

「いいの。男らしくて、とってもステキよ」

「あ　　ああ・・・」

「ずっと、我慢したんだもの、男らしいポーズ見せてちょうだい」

そっと彼を抱きしめた。

私の胸に甘えながら、急所の痛みには耐えられず、股間を押さえる彼。愛とおしい。

何度も彼の髪をなでた。

背中を珠の様な汗が伝って落ちる。

男の匂いと、女の匂いが混じりあう。

濡れた生理用のショーツの上から

彼が何度もキスをしてくる。

クリちゃんも勃起していくのが自分でも分かる。

ダメ・・・

もう・・・奈津実・・・立ってられないよ

彼の髪をわしづかみにしながら、

彼の鼻を股間へ押し付ける。

ハズカシイ・・・

そのまま、バスタブの上で私は抱かれた。

いま、お月さまと一緒に
そろそろ終わりかな

濡れたアソコを・
またいじってしまう
鏡の中の淫らな 奈津実

本当は人妻

あと数日で
20代ともお別れ
ちよっと寂しいけど

何も変わらない様な気もするの

奈津実は
奈津実だから

何も知らない
優しい夫の寝息を聞きながら
この日記をつけてる

もっと書いてもいいかしら

想い出・・・
彼のこと・・・

本当の奈津実のこと

晩秋

秋・・・

青い空

同じ空の下の何処かに

遠いけれど

あの人がいる

そう思うと

逢いたくくて

逢いたくくて

逢いたくくて

秋・・・

F a l l

落ちて行く

ブーツの季節

パンプスとは違った足音

ミニスカートとの組み合わせ

お気に入りのジーンズとの組み合わせ

いいな・・・って思うけど

本当はパンプスが好きかもしれない

だって

ブーツは

自慢の足首を隠しちゃうもの・・・

季節は

ゆっくりと・・・

確実に・・・

動いていく

いつも

私を

置いてきぼりにして

「奈津実！」

ねえ！お願い。。

誰か

私の名前を呼んで・・・

忘れてしまいそうだよ

私が誰だか・・・

何処から来て

何処へ行くのかさえ

分からなくなつて

しまいそうだよ

もう何時間も・・・

あてもなく

歩いてる

人ごみの中。。。

行くあても無く

帰るところも無い

今、すれ違った人の笑顔が
眩しすぎて・・・

下ばかり見ているの

みんな

頑張っていて

同じように

笑いながら

明日を待つんだね。。。。

おやすみなさい。。。。

もう一度

キスして下さい。

強く

・・・抱いて下さい

妖艶な花

桜が咲く。。。。

なんて妖艶な花なんでしょう

暖かくなったのに、少し肌寒いこの季節

いつものジーンズでもミニスカでもなく

必ず履いてしまうのが

白のコットンパンツ

七部丈でタイト

とっても可愛いのが♪

奈津実がこのパンツを履くのは
何故かこの季節だけ。。
本当は夏に・・・と思って買ったのに
不思議ね

この時期にだけ
履きたくなる

このパンツにストッキングは似合わない
一年で一時的だけの裸足の季節

そう・・・

白だし・薄手なので
透けちゃうのよ
だから
下着選びも慎重に

ショーツの線が見えるとカッコ悪いから
やっぱりTバックを
選んでしまう

もちろん
知ってるわよ
Tバックの線が見えてること

男の人が
それを好きだってことも

桜に合わせて
うすいピンクを選ぶ

うふっ
女って
意地悪なの

というより
自意識過剰なバカな生き物かもね

この時期になると
思い出してしまう

桜の木の下で
抱きしめられた
あの時のこと
長い くちづけ

そして

仲のよかった
先輩のこと

「癌だったの・・・」

「・・・・・・・・・・」

「ショックだったわぁ」

「・・・・・・・・・・」

「でも先生に言ってもらえて良かった。やっておかなきやなら
ないこと沢山あるのよ」

「あ・・・・・・・・なんて言ったらいいのか・・・・・・・・」

「いいの。あなたの気持ちは知ってるわ」

「・・・・・・・・・・」

「いつも来てくれてありがとうね。いつも・・・仕事場でも、
あなたからエネルギーもらってたから・・・でもね！いくら
仕事忙しくても、無理しちゃだめよ」

いつもの

人なつっこい笑顔で

彼女は

笑った

そして

会社に戻るつもりだと

私のデスク・・・奈津実が守っててね
・・・と

次の年の桜を待たずに

彼女は

逝った

会社の帰り

いつも通り過ぎる公園で

今日は足を止めた

桜の木の下で

大きな幹に体を預けてみる

あたたかい・・・

木のぬくもりと

少し肌寒い風を

感じながら

ちよっぴり寂しい公園のライトに照らされる桜の花びらを
見上げ

その隙間から
星を探そうと・・・

今いる所が
明るすぎて
星なんて
見えるわけもないのに

桜。。
なんて妖艶な花なんでしょう

もう逢えない
人たちが

残った私たちに
一年に たった一度だけ
見せる

妖艶な花

明日には
もう
散ってしまうかもしれないのに

私は
何も変わらなかったように

電車に乗り込むの

そう

桜色の下着に

見知らぬ

男の人の視線を

感じながら

河野さくら

会社の後輩のバレエの発表会を見に行った

いいなあ。

スポットライト浴びるのって

気持ちいいんだろうね

6曲目

ステージの上で踊る後輩を見ていた・・・ハズだった。。。

気がついたら
一緒に踊る・・・
男の人に目が

アマチュアバレエだから
そんなに上手じゃないのよ。

けど

白いタイツで
包まれた筋肉質な
お尻

そして

ああああああ

プツクリと膨らんだ
逞しいアソコ

ホラ！ あんなに脚を開いて

ううううっ

いかん いかん！！

必死に後輩を見ようと思うのに
奈津実の目は

白タイツの彼に釘付けなの

今度はピッタリと脚を閉じて。。。。

あああん。 いやん♪

白いタイツに影ができると

モロにカタチが分かるんだもの

それに 腰の幅に対して

あの膨らみの大きさとって・・・何？

あんなに無防備で
いいのかしら

軽く指で

ピン！

ってただけで

きつと・・・

白タイトの彼は

観客の見える前で

ステージの上で

ガクリと膝を落として

四つんばいになって

アソコ・・・押さえてしまうのよね。。

見たいわぁ

見たいの。。。。

彼の

あの時の

あの格好

恥ずかしい

あの格好

嫌だわ

気がついたら

奈津実のアソコ・・・

大変な事になってる

見ているだけで感じちゃうなんて
どうしよう・・・

白いタイトミニの日って
きまってエッチモードになってしまう。

こっそり膝の上のパンフレットの下に手を入れて

ストッキング越しに

太ももの内側を

撫でてみる

奥の方に指をのばすと

やっぱり！

このままだと

スカートにまで。。。

いっっちゃいそう。。

休憩時間に

化粧室へ

そっと

アソコに指を当ててみる

“ あっ！ “

声が出てしまいそう

クリちゃんが・・・

愛液の中で疼いている

さっきの白いタイツが頭に浮かんで離れない

とても抵抗できそうにないの

そのまま

指を動かしてしまおう

ゆっくりと

下から手で上げるように

一番敏感なところの周りを

じらすように

いや・・・

太ももまで

滴っていく

トイレの壁に

体重を預けて

大きく脚を開いて

ピクンってすると

ヒールがカツンって鳴っちゃう

はあ。。。

バカな女

奈津実って

何してるの

こんなところで

さっきの白タイトの彼が
奈津実の脚にしがみつきながら
急所を押さえて
うずくまって
必死に
男の痛みに耐えている

ああ

素敵な光景

そう思いながら
昇りつめた

はあ。。。

日曜日の午後
外は雨

もうスグ
梅雨なのね